

バングラデシュの雨季と乾季

バングラデシュは1947年に英領インド帝国から分離独立したパキスタンの一部、東パキスタン州として発足した。しかし、政府は東西間の機会の均等を図ることができなかった。経済的にも西パキスタン（現在のパキスタン・イスラム共和国）に支配されており、言語をウルドゥー語に統一するといった動きの中で、1971年3月25日にパキスタンからの分離独立を宣言し、9か月の内戦を経て（300万人もの命が奪われた）、1971年の12月16日に独立を達成している。バングラデシュの人口は約1億3000万人（2001年）、ベンガル人がその大半を占め、国教はイスラム教（ゆるやかである）、公用語はベンガル語である。

バングラデシュは西・北・東をインドに囲まれており、南方にはベンガル湾がある。平野が多く、この中央をパドマ（ガンジス）、メグナ、ジャムナ、ブラマプトラおよびその支流の川が流れ、世界最大の三角州をつくっている。たくさんの川が流れているので、わが国は母なる川の国といわれる。

バングラデシュの気候は熱帯モンスーン気候に属している。大きく、雨季（4月～9月）と、乾季（10月～3月）に分かれる。実際には6つの季節があり、それは夏（4月上旬～）、雨季（6月中旬～）、秋（8月中旬～）、霜季（10月中旬～）、冬（12月中旬～）、春（2月中旬～）である。

夏 バングラデシュは一年中暑い国と思われがちだが、4月下旬から5月にかけては夏の真っ盛りで、一番暑い季節である。5月下旬からそろそろ雨が降り始める。スコールのあとは涼しくて気持ちがいい。この時期には果物はたいへんおいしい。ライチやマンゴー、そして代表的な果物ジャックフルーツ、ブラックベリーなどが雨季の間中、市場に出まわる。

雨季 6月中旬から本格的な雨季が始まる。気温はそれほど高くないが、湿度はとても高くなる。雨季になると一日中雨が降り続き、ダッカ市内などでは小

さな洪水となる。農村部でも田畑に水が氾濫し、時々湖と間違えるほどである。また、湿原が水でいっぱいになり、魚などもたくさん捕れる。この雨季には川の水も溢れて、国土の3分の1は洪水となり、耕地に肥沃な土を供給している。バングラデシュでは、雨の日はのんびり過ごすことが多く、雨の日に食べるキチュリ（ご飯と豆を混ぜたカレー味のもの）などもまた楽しみである。子どもたちも学校に行かないで雨の中で遊んだり、家でゆっくりしていることが多いのである。

秋 8月中旬雨が段々少なくなり、雨季が終わった9月下旬頃から、再び暑さが続く。雨季と乾季の変わり目には、ベンガル湾に強力なサイクロン（熱帯低気圧）が発生する。毎年サイクロンによって大きな被害もたらされる。1991年には14万人もの死者が出た。

霜季 10月中旬から始まり、この季節の星はたいへん美しい。とくに、田舎では満天の星となる。また、一年中で、蛍が一番多く見られる時期である。この時期バングラデシュの旅行シーズンであり、たいへん暮らしやすく、日本の秋口に似た気候である。この季節に新しいお米ができ、バングラデシュ人の6割以上を占める農民たちは忙しく、また農村がもっとも豊かな季節でもあり、農民にとって一番楽しい時期である。

冬 12月中旬に冬が始まり、農村では新米のいろいろな食べ物やお菓子で楽しい生活が続く。日本の冬より寒くなく、一番寒くて6℃ぐらいで約2週間続く。バングラデシュでは北の方が一番寒い。設備もよくない生活では、人々はこのくらいの寒さでも耐えられず、死亡している人も少なくない。しかし、首都ダッカではあまり寒さは感じられない。

春 2月上旬から春に入り、花がとても美しい季節で、チューリップ、マリーゴールド、コスモスなどはこの頃咲き、タゴールの詩もこの季節をうたったものが多い。気温が上がるのは3月に入ってからである。高温が続いて乾季が始まり、水が足りなくなった畑などはたいへんな状況になる。

このように、バングラデシュでは6つの季節を過ごしている。（財）守屋留学生交流協会第21回奨学生

シャヒン=モハメド=ミザヌル=ラハマン)

財団法人「守屋留学生交流協会」は、1982年元帝国書院社長守屋紀美雄氏の株式の寄付によって設立、アジアからの留学生に奨学金を給付している。奨学生は現在までに18か国・地域231名。